

名誉会員の推挙に寄せて



杉村 宏 新名誉会員

【本学会役員歴】

第19期 理事(3年)、第22期 理事(3年)、
第23期 監事(2年)

理事2期/監事1期 合計8年



お礼にかえて

この度は、日本社会福祉学会名誉会員にご推挙いただき感謝申し上げます。

私は1960年代に社会福祉学会に入会しましたが、大学卒業後13年ほど生活保護ケースワーカーの仕事に従事し、その後北海道大学の教育学部教員として採用され、23年間「貧困と教育」や「子どもの貧困」等をテーマに研究してきました。その後法政大学の現代福祉学部で10年間過ごしましたが、教育・研究生活の3分の2以上の期間は教育福祉の分野でしたから、社会福祉学会には「遅れてきた青二才」でして、あまり貢献できないままに名誉会員に推挙され、感謝申しあげると同時に恐縮もしております。

私の学生時代は、わが国の社会福祉学を作り上げた、いわば学会第一世代の先生方が教鞭をとっておりましたが、私はクラブ活動にうつつを抜かし、大学では落ちこぼれておりました。ですから社会福祉とは、貧困に陥った人々に対して援助・支援し人間らしい生活を取り戻す実践活動であるといった、一面的で薄っぺらな認識しかありませんでした。この50年間はただそれだけでやり通してきた、その意味では誠に「極楽とんぼ」のような教育・研究活動でした。その中で常々、すべての人々に無条件で保障される『人間らしく生きる権利＝生存権』が、どのような社会的・歴史的背景の中で生まれたのかを考え、「戦争国家」の人間観を否定し克服するために、第2次世界大戦のさなか模索された「福祉国家」を支える人間観として構想された、新たな社会権ではないかという仮説を提示しました。後にどなたかが「生存権なくして平和なく、平和なくして生存権なし」と言われているのを知り、当たらずとも遠からずと思った次第です。

おりしも、日本を「戦争国家」に逆戻りさせる法律「改正」が、多くの国民の反対を押し切り、政権与党の数の力で強行採決されました。このような制度・政策に抗し、反対する社会運動はともすると政治的活動と見られがちですが、社会福祉にかかわるものにとっては、その学問的基盤を守る活動であるように思います。

このような政治状況の中で社会福祉学系学会の会長が「戦後70年の8月15日に寄せて」連名で声明を発表しましたが、改めて社会福祉を学ぶものとして戦争との関係を直視し、戦争政策に抗する活動の重要性を指摘されており感銘を受けました。阿部志郎先生の警鐘も含めて深く心に刻み、社会福祉を学ぶものとしてこのような態度を大切にしたいと思っております。